

自然学校推進事業
20年目の評価検証

生きる力を育む自然学校

～自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ～



平成 20 (2008) 年 3 月

自然学校評価検証委員会

はじめに

『人は自然とのふれあいの中で自然の神秘、優しさ、恐ろしさなどに感動し、豊かな感性、問題解決能力、粘り強さなどを培うとともに、人とのふれあいを通して、生きる喜びや苦しみを知り、思いやり、協調性、社会性などを身に付ける』

これは、本県が昭和62年に開催した「こころ豊かな人づくり懇話会」の提言である。県教育委員会では、これを基本理念に、昭和63年から県下の公立小学校の5年生を対象に自然学校推進事業を実施し、今年度20年目を迎えた。

この間、平成7年には阪神・淡路大震災が発生し、生命の尊厳や助け合いの大切さなど、貴重な教訓を学び、今後の教育に生かすべく様々な取組を進めてきた。その矢先、平成9年には、神戸市須磨区の事件が発生した。県が設置した「心の教育緊急会議」では、このような痛ましい子どもの事件の背景として、現実と非現実、生と死の境目が見えにくくなっており、生命の尊さやいのちの重みを実感としてとらえきれない子どもが増えていることや、親子とも時間的にゆとりのない生活の中で、ふれあいの機会が減少し、社会で生きていくために必要な規範意識が十分に身につけていない、また、ゲーム器機を中心とした遊びが増え、生々しい感情や言葉のやりとりから他人の心の動きを感じる機会が少なくなっているなどが指摘された。

このような諸課題に対して、「幼児期からの生活体験や自然体験などの直接的な体験を積み重ね、みずみずしい感性や豊かな人間関係を育てることが必要である」との提言も踏まえながら、自然学校推進事業は、「心の教育」の充実をめざして、子どもたちの「生きる力」を育む体験活動の場としても様々な教育的な効果をあげながらその歩みを続けている。

一方、教育基本法の改正や新学習指導要領の改訂等、国の教育改革の流れにおいても、体験活動の重要性が常に述べられる状況にある。その背景には、科学技術や情報化社会の急激な進展や少子化、核家族化が進む中、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化したことがある。このことから、子どもたちが地域で活動する機会が減少し、社会性が身に付いていない、直接体験が不足しているなどの課題や「インターネット社会におけるいじめ問題」など、新たな問題も発生している。また、人間関係がうまくつくれず、集団生活に適応しにくい子どもが増加傾向にあることなどが考えられる。

こうした状況の中、県では自然学校が実施20年目を迎えた今年度、「自然学校評価検証委員会」を設置し、自然学校の成果・課題を踏まえ、今後の充実方策について以下の点を大きな観点として検討を行った。

- ◇自然学校は、これまで大きな成果を上げているが、今後一層の充実を図るためには、社会や子どもたちの実態の変化を踏まえた新たな取組や重点課題が必要ではないか。
- ◇本県が推進する体験活動を子どもの発達段階に応じて体系的に実施する観点から、自然学校と小学校3年生を対象にした環境体験事業との関連を図ることが大切ではないか。
- ◇自然学校での体験活動をその場限りの活動で終わらせず、自然学校を核とした事前・事後の学習や活動と関連させ、まとまりのある教育活動として実施することが大切ではないか。

その結果、「本県が全国に先駆けてスタートした自然学校の教育的役割は、益々重要性が増してきており、自然学校の原点である事業スタート時の基本理念を重視すること」、また、「豊かな自然の中で、学校では経験できない自然や社会等の様々な体験活動を通して、豊かな人間性や問題解決能力などを育成する人間教育の場として、社会の要請や子どもを取り巻く環境の変化に対応した自然学校として、一層の充実に向けた取組が大切である」等の意見を得たところである。

県では、これらの提言を受け、自然学校の充実を図るための見直しとして、

- 視点1**：豊かな自然、地域の人々等との出会いを通して、学校では経験できない感動体験の機会となっているか
- 視点2**：学校での学習を生かした探究的・問題解決的な豊かな学びの場となっているか
- 視点3**：自主的・実践的な活動を生かした連帯感を深める集団活動の場となっているか
- 視点4**：家庭や学校を離れた長期宿泊体験が社会的自立へのステップとなっているか

の4つの視点を特に重視し、

「自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ」をテーマに取り組むことが重要であると考えた。

各学校においては、これまで自然学校のねらいに基づく体験活動を工夫するとともに、自然学校を通して、子ども理解を図り、教師と子どもとのこころが通い合う人間関係をつくることなどに配慮した取組を進めてきたところであるが、今後、「自然学校評価検証委員会」の提言内容に基づく見直しの視点や充実に向けた方策等を参考に、自然学校の一層の充実に向けた取組が期待される。

兵庫の自然学校

「こころ豊かな人づくり懇話会」・「こころ豊かな人づくり全県フォーラム」(提言要旨)

児童生徒の自然とのふれあい、家族、友達、地域の人々との心のふれあいが、人間形成に大きな意義がある [S62年]

5泊6日の「自然学校」のスタート

学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し、児童が人や自然とふれあい、地域社会への理解を深めるなど、様々な活動を年間指導計画に位置付けて実施することにより、心身ともに調和のとれた健全な児童の育成を目的とする。[S63年]

「心の教育」の充実を図る兵庫の教育

◇「阪神・淡路大震災」の教訓 [H7年1月]

子どもたちは、震災を通して、いのちの大切さ、生きていることのすばらしさを学んだ。この教訓を生かすため、生命あるものを身近に感じさせ、生命を尊重するところを醸成するプログラムを開発し、実践する必要がある。また、便利で快適な生活を送っている子どもたちに不便を強い、自分の体を使い、知恵を働かせて生活する体験を積み重ねることが大切である。

◇「心の教育緊急会議」の提言 [H9年10月]

子どもたちの遊びを通しての自然体験や生活体験などの機会が減少していることが人間関係の希薄化や社会性の欠如につながっている。自然の中には美しいもの、恐ろしいものなど様々なものが渾然と存在している。その意味からも未知のものとの出会いや冒険への挑戦、仲間との交流を通して、子どもたちに自然に対する畏敬の念やたくましく生きる力を育むことが大切である。

自然学校推進事業検討委員会 [H9年度]

- ◇自然学校の原点に帰り、自然と豊かにふれあう活動を通して、自然に対する認識を広げ、深めさせるプログラムを一層充実させる必要がある。
- ◇震災体験を踏まえ、生命あるものを身近に感じさせ、生命を尊重するところを醸成するプログラムを開発し、実践する必要がある。
- ◇自然学校で体験し、学んだことを学校や家庭等、普段の生活に生きてはたらくよう配慮することが大切である。など

自然学校推進事業検討委員会 [H13年度]

- ◇学校生活では体験できない非日常的な体験活動を重視し、滞在型の自然学校やゆとりあるプログラムを設定するとともに、児童が自然や人、地域社会と十分にかかわることができるよう工夫することが大切である。
- ◇児童が計画段階からプログラムづくり等に積極的に参加したり、児童の興味・関心を重視した選択プログラムを取り入れる等、児童の主体性を重視することが大切である。
- ◇自然学校の趣旨を生かし、ねらいを達成させるには、長期間の連続したまとまりのある活動日程が必要であり、安全・健康面に十分配慮し、特色ある自然学校を実施することが大切である。

自然学校評価検証委員会 [H19年度]

～自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ～

- ◇自然学校の一層の充実を図るための「6つの方策」
 - 〈方策1〉 自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実
 - 〈方策2〉 事前・事後の学習活動の一層の充実
 - 〈方策3〉 学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実
 - 〈方策4〉 社会性や自立性等を育むための集団活動の充実
 - 〈方策5〉 子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実
 - 〈方策6〉 家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

方策1：自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

現状と課題

自然学校は、5泊6日のゆとりの中で、学校では得難い体験活動を行うことで、自然の美しさや神秘性、厳しさなど様々な自然とふれあい、豊かな感性や知的好奇心を育むとともに、つらいことを我慢したり、友達に相談したりする経験を通して、自分自身や友達の長所・能力などを発見し、人間関係を深める機会となっている。

また、普段、親や身の回りの人たちにいかに世話になっているかに気付き、感謝する心が育めることや、親元を離れての生活は家庭を見つめるよい機会となっていることなど、実施校から様々な成果が報告されている。今後は、これらの教育的効果に加え、自然学校が学校教育の中で果たす役割を一層高め、自然学校での学びと他の教育活動との関連を図った取組が期待される。

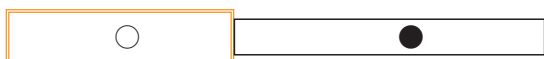
自然学校は、教育課程上学校行事に位置付け、総合的な学習の時間等との関連を図って、探究力や問題解決力など、自然学校と関連付けることで育てる資質・能力を明確にして取組ことが大切である。

例えば、自然学校の実施前に課題設定や課題解決への見通し、情報収集などの学習を行い、自然学校では、探究的な活動を特質とする総合的な学習の時間を組み込むなどして実施する。そして、実施後には、自然学校で問題解決を図った事柄や新たに発見した事柄などの学習成果をまとめるなど、自然学校と総合的な学習の時間の関連を図り、自然学校を「体験活動プラス探究型」の学習の場として展開することも考えられる。

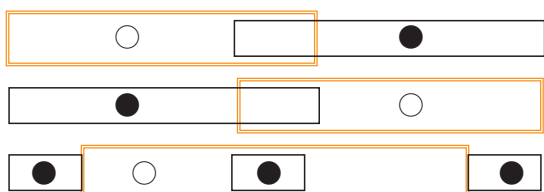
さらに、自然学校で学んだ自然のすばらしさ、優しさ、恐ろしさなどへの感動をもとに、道徳教育との関連を図った取組も考えられる。

〔学びの連続性・発展性を重視した自然学校例〕

A: 自然学校を機に総合的な学習の時間等を実施



B: 自然学校に総合的な学習の時間等を一部組み入れて実施



※ ○: 自然学校 ●: 総合的な学習の時間等

〔自然学校と他の教育活動との教育効果を相互に生かす自然学校例〕

各教科、道徳、総合的な学習の時間等で学んだ知識・技能等

自然学校を通して学んだ探求的・実践的な態度や感性等の成果

生かす・発展

生かす

自然学校

各教科、道徳、総合的な学習の時間等

各学校において、自然学校を通して児童に学ばせたいことや体験させたいことの十分な検討を行い、自然学校の目的を一層明確化し、自然学校での豊かな学びを総合的な学習の時間や道徳など、普段の教育活動に生かすなど「知」の総合化を図る取組が期待される。

評価検証委員会の提言内容

〔教育課程上の位置付けの明確化〕

自然学校は、特別活動の学校行事を基本とし、ねらいに応じて総合的な学習の時間や道徳との関連を図るなど、教育課程への位置付けを明確にし実施することが大切である。実施にあたっては、自然学校が5泊6日の体験活動として完結するのではなく、自然学校と事前・事後の学習や集団活動などとの関連を図るなど各学校の創意ある取組が大切である。

〔自然学校での学びを普段の教育活動に生かす工夫〕

自然学校における子どもたちの体験を通じた多様で実感を伴った学び方を普段の授業や教育活動に取り入れることが大切である。例えば、自然学校での成果物を学校へ持ち帰り、成果の象徴として学級経営や授業に生かすなどの工夫が大切である。

〔日常につながる非日常体験の充実〕

自然学校は、日常から離れた非日常の体験を通して、自然等との感動的な出会いや新たな気付きなど、自然学校での豊かな学びが他の教育活動や生活に生きることに価値がある。このため、「日常から非日常へ、そして日常へ」のサイクルを踏まえた実施が求められる。

ねらい

- 自分たちの地域を流れる河川に住む魚や野鳥などに関心をもつとともに、河川の役割について、資料や聞き取りなど様々な方法で調べようとする。
- 自然学校で自分たちの住んでいる地域を流れる河川の下流地域を訪れ、海に生息する生き物や自然環境に関心を持ち、興味ある活動にチャレンジする。
- 水の循環や河川を通じた生活・文化のつながりについて認識を深めるとともに、身の回りの自然や水環境を大切にしようとする態度を育てる。

総合的な学習の時間等

- 地域の河川について、課題に基づくグループで活動を行う。

「スケッチ」グループ
橋 水辺の植物 河川敷

「生き物探検」グループ
水鳥 水生生物 昆虫 魚

「石っこ研究」グループ
石の種類(色、形、割れ方、音)

「川の昔話探し」グループ
渡し船、川のお祭、治水・利水

- 自然学校で訪れる下流地域や海での活動計画を立てる。
・下流地域や海までの経路、海での活動、海の自然環境 など

自然学校

- 子どもたちが日程や安全上のルールを決め、楽しく自然に親しむ。(特別活動)
・シュノーケリングや磯観察等を通して、海にふれる

- 山～川～海の自然のつながりを意識し、「海の役割」について探究活動を行う。
・川幅、水の流れ、河口の様子などから地域を流れる河川と下流との比較をする
・漂着物や海浜植物の探検や海で働く人々から海の大切さの話を聞く

〔総合的な学習の時間〕※自然学校の内、2日間実施

- グループで連帯感を深めながら海での活動を満喫する。(特別活動)
・魚釣り、砂の造形、磯遊び、海の生き物などの活動

総合的な学習の時間等

- 河川の上流地域を調べる。(谷川、ダム、滝、水質、水性生物など)
- 「河川と私たち」の関係について調べたことをまとめ、学習発表会をする。

テーマ ～「川」のめぐみ～
・生き物の宝庫、いのちを育む

テーマ ～「川と人」とのつながり～
・川の歴史、生活用水、農業用水

テーマ ～「川と海」とのつながり～
・川を中心とした水の循環

テーマ ～私たちにできること～
・クリーン作戦、環境問題の調査

自然学校の事前・事後においては、総合的な学習の時間の取組とともに、自然学校の準備やまとめの活動など、特別活動による活動を行う。



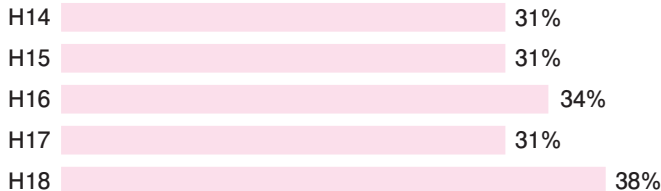
方策2：事前・事後の学習活動の一層の充実

現状と課題

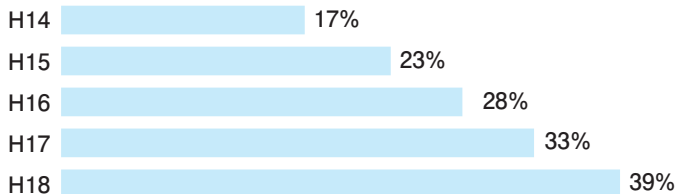
県教育委員会の調査では、事前学習において、児童が実施場所をインターネットで調べ、児童の希望を取り入れた計画作成やプログラム構成に児童の発想を反映させようとする取組など、児童の自然学校への主体的な参加を重視する取組がやや増加傾向にある。

また、自分たちの居住地と実施場所との環境比較を行い、自然学校を環境学習へ発展させたり、自然学校での生活のめあてを学校や家庭での生活でも継続して実践するなど、自然学校での経験をその後の生活や学習に生かす取組が増加傾向にある。

■計画段階からの児童の参画の状況



■その後の生活と関連づけた取組の状況



(自然学校実施状況調査：兵庫県教育委員会)

しかし、自然学校の目的が明確ではなく、プログラムに一貫性がなかったり、教師の役割が明らかでないなど、一部には、自然学校を通して児童に何を学ばせるかが十分に明確になっていないとの指摘もある。

このため、今後は、自然学校の目標を一層明確にするとともに、5泊6日の実施期間中だけでなく、「事前学習～自然学校～事後学習」を含めた全体計画の作成のもと、充実した自然学校を実施することが大切である。

また、計画作成に児童が参画する取組を一層推進し、児童がプログラム構想や集団生活のルールづくり等に主体的に取り組むことが期待される。

さらに、事後学習においては、まずは、教師が「事前学習～自然学校～事後学習」を通した自然学校のねらいが達成されたかどうかを評価し、自然学校の成果や子どもの学びをその後の学習や生活に生かすことが大切であるとともに、子どもたち自らが自然学校を振り返り、自らの成長を実感できるような指導の工夫が期待される。

評価検証委員会の提言内容

「子どもにとっての自然学校の目標の明確化」

自然学校の充実に向け、事前・事後学習があるからこそ学校教育としての意味がある。例えば、事前にバランスのとれた食生活について学習を行い、自然学校では、地元で採れた米と野菜で3回の野外炊事に取り組み、事後では、苦手な野菜にチャレンジした自然学校の経験を生かして食生活を見直す学習など、一定のテーマ性ある自然学校の実施が大切である。

「事前・自然学校・事後を通した言語活動の充実」

自然学校は、事前・自然学校・事後を通して、それぞれの段階に応じた学習や活動に係る言語活動が大切である。また、事後では、体験したことをレポートなどにまとめて表すなど、言語活動を充実させるとともに、感動体験を様々な表現方法で他者に分かりやすく伝えるなど、自然学校での学びを集団で深め、定着を図るための学習活動が大切である。

「子どもの自己・相互評価の重視」

子どもたちに自然学校のねらいや活動の目的等を理解させるためには、自然学校で子どもが活用する評価シートを作成して事前学習を充実させたり、事後学習において、個人として気付いたり感じたりしたことをクラスや学年全体で伝え合ったりして他者と共有し、自然学校での豊かな体験が広い認識につながるよう工夫することが大切である。

ねらい

- 自然に関心をもち、進んで自然とふれあうことで、「自然から学ぶ」
- 体験活動を通して、仲間と存分にふれあい、助け合うなど、「仲間・集団から学ぶ」
- 個人及び集団で考え、工夫し、「最後までやり抜く力」を育てる

事前学習

- 児童の計画段階からの参画を図る指導
 - ・児童への自然学校事前アンケートを実施し、「自然学校で学びたいこと」「自然学校で実施したい活動」「自然学校でつきたい力」を調査する。
 - ・教員の願いや児童のニーズから自然学校のねらいを設定し、実行委員会を立ち上げ、ねらいを達成するために有効な活動のプログラミングを行う。
- 一人一人に自然学校のねらいをもたせ、意欲を高めるための指導
 - ・学年で共通のねらいを設定することは勿論のこと、児童一人一人にも個別の目標をもたせ、意欲が高まるよう配慮する。

自然学校

1日目 間伐・染め木 ボンファイヤー (振り返り)	2日目 (振り返り)	3日目 トーテムポールづくり (振り返り)	4日目 (振り返り)	5日目 植樹 カウンシルファイヤー (振り返り)	6日目 植樹
------------------------------------	---------------	-----------------------------	---------------	-----------------------------------	-----------

自然から学ぶ

1日目に直径10cm程度の木を伐採し、それを色水に漬け込む。そうすると木が色水を吸い上げ、葉の一枚一枚まで着色する。その木を切断したり削ったりすると着色された美しい年輪などが現れてくる。それに自然物を飾り付けたりしながら、グループで協力して「トーテムポール」に仕上げていく。

最終日には、山から木を頂いた感謝の気持ちと自然に対する畏敬の念を込め植樹を実施する。

仲間・集団から学ぶ

事前学習で設定した自然学校のねらいを大切にするため、毎日の「振り返りの時間」を設定する。体験から生まれた発見や課題を確認・共有させながら仲間意識を高めるという点で、ねらいに迫る重要な活動である。

1日目のボンファイヤーは、児童の緊張感を解す手立てとして取り入れ、5日目のカウンシルファイヤーは、5日間を静かに振り返り、共に分かち合う時間として実施する。

事後学習

教科等での学習へつなげる指導

図工の時間に、自然学校で染め木にした間伐材と染め木以外の自然素材とを合わせて「森の標本箱」を作り、図工展で保護者や全校生に披露する。

社会科「里山づくり」の学習では、自然学校での間伐や植樹などの活動を思い起こし、その経験をもとに学習を展開する。

集団づくりにつなげる指導

実施後に児童を対象に自然学校の集団活動や集団生活に関するアンケート調査を実施する。調査結果を自分や仲間の努力を認め合い、支え合い協力し合うことの大切さについて話し合うなど、学級活動に活用し、集団づくりに向けた実践的態度の育成につなげる。

〔自然学校後の児童の姿〕

自然学校後、児童は様々な学校行事等で組織される実行委員会に高い興味を示すようになった。事前学習で、実行委員会を組織し、児童の発想や興味関心をプログラムに反映させる取組を進めた。その経験から、児童は、実行委員会をやる気を起こせば誰でも活躍できる場ととらえたようである。「自分も学級や学年を代表して、みんなの気持ちや考えを行事に生かすことにチャレンジしたい」とする傾向が強くなった。

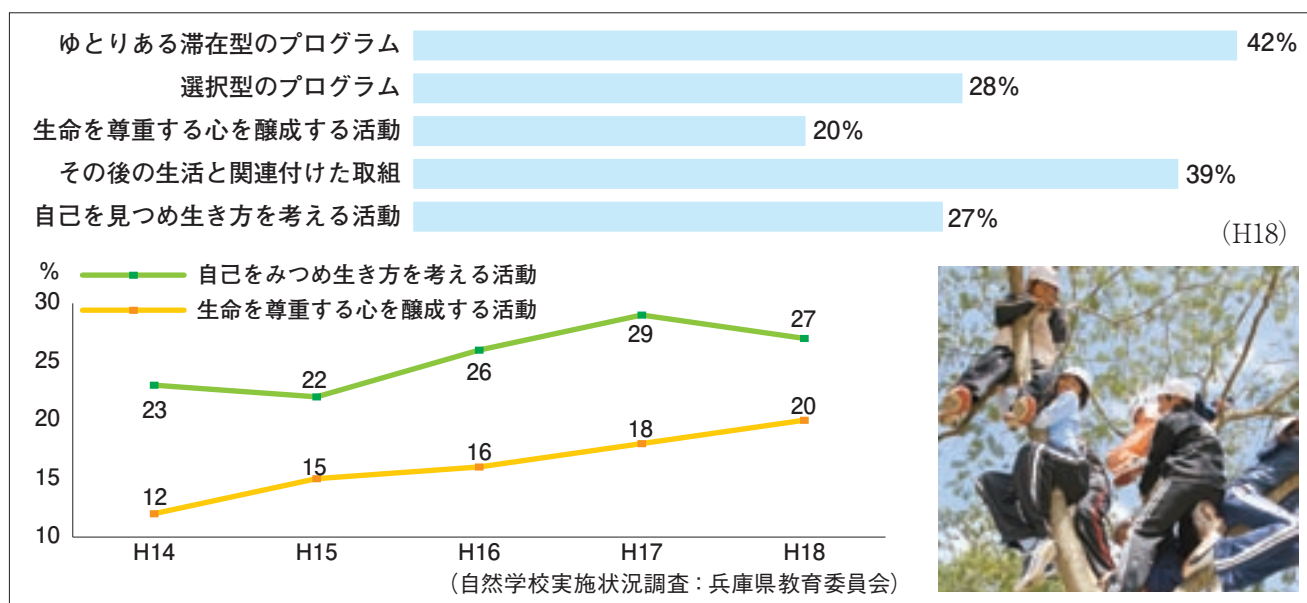


方策 3：学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

現状と課題

県教育委員会の調査では、各学校の傾向として、「ゆとりある滞在型のプログラム」や「その後の生活と関連付けた取組」を重視する傾向にあり、また、「生命を尊重する心の醸成を図るプログラム」や「自己を見つめ生き方を考えるきっかけとなるプログラム」はやや増加傾向にある。

- ゆとりある滞在型のプログラム例
 - ・実施期間中に野外炊事を複数回継続して実施し、失敗・成功体験を重視
- その後の生活と関連付けた取組
 - ・自然学校で設定した生活のめあてを大切にし、学校や家庭でも継続して取り組む
- 生命を尊重する心の醸成を図るプログラム例
 - ・総合的な学習の時間と関連付けて、コウノトリの学習を実施
- 自己を見つめ生き方を考えるきっかけとなるプログラム例
 - ・最終日、自然学校を静かに振り返るとともに、友達の思いを知る機会を設定



自然学校の実施にあたっては、自然学校のねらいに応じたプログラムの開発・設定が重要であり、どのようなプログラムを設定するかではなく、どのように考えてプログラムを実施するのかなど、プログラムデザインを明確にすることが大切である。また、プログラムの設定においては、指導体制、活動上の配慮事項、リスクマネジメント等、様々な専門性が必要であり、教員の指導力とともに、設定したプログラムを子どもの状況や環境の変化に柔軟に対応する運営力が期待される。

評価検証委員会の提言内容

「子どもたちの心と体の解放」

自然をフィールドとした活動が持っている本質の一つは、空間的・時間的な非日常への解放であるため、子どもたちが心と体を自由に活動できる環境が大切であり、その活動を通して、必要な能力や社会性を育むことが大切である。

「地域の特性を生かし、学校教育では得難い教育効果を想定したねらいの設定」

自然学校は、直感的、体験的に学ぶことを大切にし、実施場所の地域の特性を生かした活動を重視するとともに、場合によって、早朝や夜間など、通常の学校教育の内容や環境では得難い活動が可能であるため、多様な観点からねらいを設定することが大切である。

「自然の本質にふれたり、達成感を味わうプログラムの設定」

朝日や夕日を見たり、闇を体験し、時の流れや真の静けさなど自然界の根源的なことへの出会いを通して、自然が容易にコントロールできないことや日常で考えていた自然観とは異なった自然観に気付くような体験も大切である。

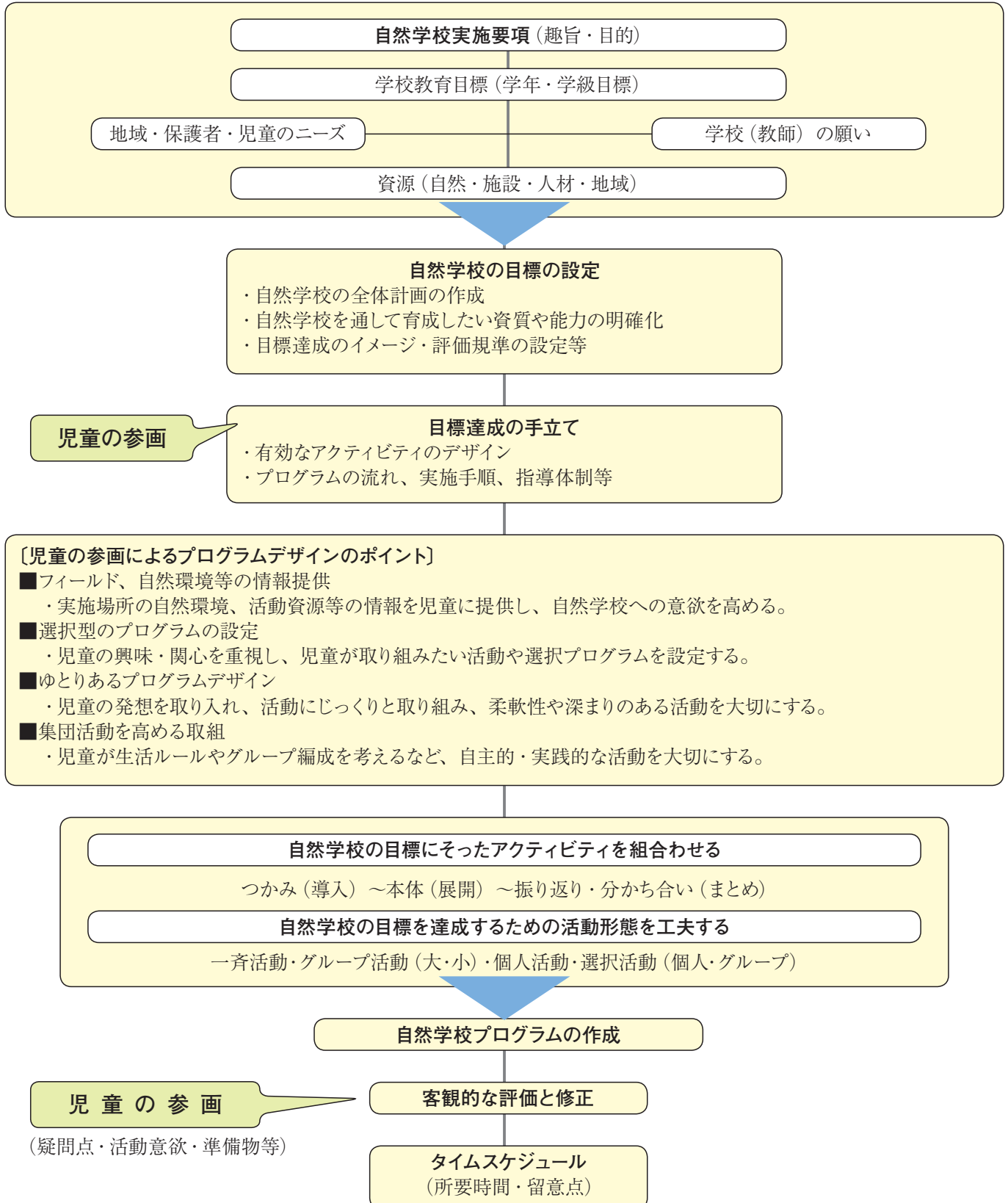
「教師のプログラム開発力の向上」

子どもの興味・関心やフィールドの良さを生かすことを基本に、魅力あるプログラムの開発・設定とともに、子どもの目線に立ち、子どもの状況や環境に応じて柔軟にプログラムが実施できるなど、教師の専門性や指導力を高める研修の場や各学校の特色ある取組や蓄積された成果等について、情報交流できる場を増やすことが大切である。

プログラムデザインの構図

自然学校のプログラムデザインは、自然学校の目的を実現するためのプログラムづくりであり、教師の意図、具体的なねらい、テーマ等をアクティビティ（活動）という目に見える「動き」「形」を用いて構成するものである。

プログラムデザインを行う上で、最も大切なことは、子どもたちが何を感じて、何を考えてほしいかというテーマであり、留意点としては、子どもの状況に配慮した流れである。単に効果の高いと思われるアクティビティの羅列は、よいプログラム構成とはならない。



方策 4：社会性や自立性等を育むための集団活動の充実

現状と課題

県立南但馬自然学校が実施した「自然体験学習の実態と教育的効果についての調査研究」では、事前・事後の質問紙調査による自然体験学習前後の児童の態度変容の集計の結果、①朝起こされなくても自分で起きることができる ②友達よりうまくできないことがあっても、いやになったりせず頑張り通すことができる ③脱いだ服や持ち物はきちんと整理できる ④歩いている途中で疲れても、文句を言わないで歩き通すことができる ⑤班長やリーダーを積極的に引き受けられることのできるなどの項目において変容が大きく、自然体験学習の教育的効果を把握することができた。

■自然体験学習前後の児童の態度変容

態度変容の因子	内 容
ア 自己判断力・自己成長	自分で様々な状況を判断し、自分で行動を決めたり、目標に向かって努力したり、困難に出会ってもあきらめないなど、忍耐力や努力に関する項目
イ 対人関係スキル	新しい友だちを簡単に作れるや誰とでも気軽に話ができるなど、対人関係に関する項目
ウ 自然への感性	自然の中での新しい発見への感動や自然と人間の関係性への理解など、自然への意識や感情的態度に関する項目
エ リーダーシップ	リーダーを引き受けたり、意見をまとめることができるなど、リーダーシップに関する項目

(平成 15・16 年度県立南但馬自然学校研究紀要)

また、自然学校では、ねらいにあった活動内容の設定とともに、ねらいに応じた活動形態の工夫が重要である。特に、社会性等の育成を図るためには、話し合い活動や協力し合える場面など、人間関係を深める活動を重視するとともに、トラブルなどを時間をかけてじっくりと自分たちで解決する時間的・空間的なゆとりや柔軟性が大切である。

今後の自然学校の実施にあたっては、集団活動や宿泊体験としての意義を踏まえ、集団生活を充実させる活動内容を工夫するとともに、活動目的に応じた活動形態の工夫が期待される。



評価検証委員会の提言内容

「社会性を育むプログラムの開発・設定」

自然学校が集団活動を通して社会性や規範意識を育む場となるよう、集団活動の視点からプログラムを設定することが大切である。例えば、グループ活動を有効に活用し、多くの子どもがリーダー経験ができるよう集団活動の価値を生かし、集団での学びを重視した指導を工夫することが求められる。

「こころを通い合わせ支え合う活動の設定」

学校において、自分に自信がもてず、友達関係に不安を感じている子どもが、自然学校では、失敗しながらも仲間と一緒にチャレンジする経験を通して、集団への連帯意識を高め、人間関係づくりや社会的自立への契機となる活動を工夫することが大切である。

「集団活動・生活を通して育む実践的な態度」

自然学校は、自然体験の場であると同時に、様々な集団活動・集団生活体験の場ととらえ、例えば、自然学校での生活上のルールを子どもたち自身が作り、実践し、必要に応じて修正するなど、自主的、実践的な態度を育む好機とすることも大切である。

「長期の宿泊体験の意義を生かした活動の重視」

ホームシックを乗り越えるなど長期宿泊体験の意義や困難を乗り越える活動などを大切にし、自立心を育むとともに、自然学校が集団への所属感や連帯感を深めつつ、仲間の大切さを実感する機会とすることが求められる。

学年当初は、ケンカや友達同士のいさかいが多く、学級全員で取り組む活動を計画しても、「めんどくさい」や「しんどい」と言った発言が大勢を占める状況があった。そこで、自然学校においては、まとまりのある学年・学級集団を目標に、仲間づくりや集団づくりを主眼に置いた活動を計画することとした。

自然学校への教師の願い

～まとまりある学年集団にしたい、達成感を体験させたい、自然の豊かさを学ばせたい～

ねらい

- 自然の中で、多くの仲間・人と関わりをもち、人のもつ「やさしさ」にふれる
- 困難なことでも力を合わせてやり遂げる体験を通して、集団としての自信をもつ
- 自然に関心をもち、自然環境の多様さや大切さを感じる

具体的な手だて

- ・失敗しても何回もチャレンジできる時間的・精神的なゆとりを大切にするため、滞在型の自然学校とする
- ・子どもたち自身に自然学校の目標を共有させ、自主的・実践的な活動を重視する
- ・目標が達成した状況を明確にし、目標に対する評価規準を設定する
- ・毎日「振り返りの時間」を設け、グループ及び個人でその日の活動で気付いたことなどを整理し、次の活動のめあてをはっきりもたせる

プログラムデザイン

- ・グループ活動を有効に取り入れ、みんなで力を合わせればできそうな活動や課題解決型の活動を難易度に応じて設定する
- ・「水」に関する環境学習に取り組んでいるため、学校での学習との関連を図るプログラムを取り入れる
- ・体験から学ぶことを重視し、火おこし、ランプシェイド、ファイヤーなど、「火」にかかわる活動を毎日設定し、プログラムにつながりをもたせる

プログラム例 ～グループ・チャレンジ「冒険の旅に出かけよう」～

- 鉄道・バス・徒歩で地域の「わき水」や日本海の海水採取のアドベンチャーツアー
- バスの時刻・金額・所要時間等を考え、旅のすべてをグループで計画・実行・評価
- 旅の途中で起こるトラブルやアクシデントをグループで協力して解決

- ・地域の方が公民館を開けてトイレや休憩場所を提供して下さった
- ・道に迷った時、尋ねた地元のおばあちゃんから親切丁寧に道を教えてもらった
- ・旅の途中、一人が疲労で歩けなくなり、メンバーで肩を貸し合いながらゴールした
- ・土砂降りの雨の中、ゴールの瞬間、メンバー全員が抱き合って涙を流した

- グループ毎のゴールを全グループで迎え、採取した「わき水」で名水ドリンクを作るとともにご飯を炊き、日本海の海水から作った塩でおにぎりを作り、ツアーの成功を祝うパーティーを実施

自然学校後の主な教育活動例

- 実施後も毎日「振り返り」を実施し、感じたことや気付いたことを確認し、「みんなにとって居心地のいいクラス」にするためのルール作りに役立てた。また、教科の学習においても自己・相互評価を継続し、「気付き」をその後の学習に生かす指導を行った。
- 自然学校を契機に学年集団が一層まとまるよう、学校生活の中で学級間交流や学年活動などを実施し、集団活動の充実を図る取組を進めた。
- 自然学校での「わき水」を探す活動を自分たちの地域でも実施し、「地域と水」との関係や「豊かな水」を生み出す自然環境について学習を深めた。



〔子どもたちの振り返り〕

- 7/11 今日は少しみんなの気持ちがバラバラになって、あまり目標が守れなかった。明日はもっとよくなればいいな。
- 7/12 今日、アドベンチャーツアーに行って、グループ全体がすごくまとまった日になった。あと2日、このまとまった気持ちで頑張ります。
- 7/13 今日は最高の活動でした。おいしいおにぎりをたくさんつくりました。最後の振り返りファイヤーで泣きました。「やっぱりこの班、大好きやー」

方策5：子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

現状と課題

本県では、平成19年度より小学校3年生を対象に、環境体験事業を実施し、人間形成の基礎が培われる時期に命の営みやつながり、命の大切さを学ぶための体験型の環境学習として、今後、県下すべての学校での実施をめざしている。

環境体験事業（小学校3年生）

五感を使って、自然の中で命のつながりを学ぼう！～見て ふれて 感じて 心をはぐくむ～

●学習内容

地域の自然の中に出かけて行き、地域の人々等の協力を得ながら、自然観察や栽培、飼育などの自然体験活動を通して、環境の大切さを知る。

事前学習

⇒

校外環境体験活動（年3回程度）

⇒

事後指導

里山での体験	（カブト虫の飼育 クヌギの苗作り 植樹 下草刈り 等）
田や畑での体験	（米作り 黒大豆や綿花の栽培 棚田の自然観察 等）
水辺での体験	（ホタルの飼育 希少植物の栽培 水辺の生き物の観察 等）
地域の自然の中での体験	（草花や昆虫観察 野鳥観察 自然を活用した体験型学習 等）

この3年生での環境体験を5年生における自然学校に有機的につなげることが必要であり、今後、自然学校を環境学習の機会や場としてとらえ、実施することが期待される。

小学校における環境教育のねらい

●環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・事象に対して、興味・関心をもち、意欲的にかかわり、環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。

●環境に関する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく問題解決の能力と、その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関して、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方を育むようにする。

●環境に働きかける実践力の育成

環境保全のためにどのような生活様式をとり、どのような実践的な行動をとるべきかなどについて考えて行動することや、自ら責任のある行動をとり、協力して問題を解決していくことなどができるようにする。さらに、日々の生活における働きかけだけでなく、持続可能な社会の構築に向けて、将来においてもよりよい環境を創造するための働きかけをすることができる実践力も培うようにする。

環境教育指導資料小学校編（H19年3月：国立教育政策研究所教育課程研究センター）

評価検証委員会の提言内容

「生命を尊重する心を育む自然学校」

3年生の環境体験事業では、1・2年生での生活科の学習も踏まえ、自然の中で五感を使って命の大切さや命のつながりを学ぶことが求められ、これら低学年期での学習や体験を踏まえ、自然学校では、自らの命と自然界の命との呼応や命の尊さの認識などを発展的に学ぶための指導の工夫が大切である。

「子どもの成長過程をふまえた体験活動の系統的な実施」

- ・3年生の環境体験事業では、自然にじっくりとふれ、自然を感じることをねらいとし、自然学校では、事前学習や導入段階で3年生の経験を生かし、自然の多様性に気付くといった系統性が考えられる。また、学校の実態に応じて、4年生における体験活動の工夫も考えられる。
- ・栽培活動、飼育活動、環境体験活動、自然学校など、学校で実施している自然体験、社会奉仕体験、勤労生産体験、芸術・文化体験、交流体験等のねらいを明確にし、小学校6年間を見通した体験活動の継続的・系統的な実施が大切である。

体験活動の充実を図るためには、次のような子どもの成長過程や体験活動を通じた教育的効果、また、子どもたちの興味・関心等を十分踏まえた活動内容とすることが大切である。

小学校低学年：体験活動から「気付き」が生まれる

〈子どもの中で活動がつながるようにする〉

小学校低学年は、体験活動の期間が少し空いても、記憶の中で、関連あるものをつなげられるようになってくる。このため、例えば、学校行事との関連を図り、類似した関連の深い活動が続けることで、気付きが定着したり、まとまった理解として成り立っていくようにしたりすることが大切である。

〈活動の場に親しみ、安心して活動ができるようにする〉

体験活動は、どのような場で行われるかで意味が異なる。たまたま出会った一つの場面の印象がずっと心に刻まれる場合もあるし、なじみのある場所では、繰り返し出会うことで、多種多様な気付きが生まれ、意味を考え、学びが発展する。このため、体験活動のねらいに応じた活動場所を設定する工夫が大切である。

〈自分たちの生活や活動とつながるようにする〉

体験活動を豊かにするためには、子どもたちの日常の生活の場では見られなかったような対象と関わる活動に対しては、日常の生活の場においてもそれらと出会い、体験活動と結びつけられるよう配慮することが大切である。

小学校高学年：物事を対象化し、社会への認識が広がる

〈自分との関わりを明確にし、主体的に取り組むようにする〉

小学校高学年になると、物事をある程度対象化して認識することが可能になってくる。自分のことも客観的にとらえられるようになることから、自分と対象との関わりが新たな意味をもつようになる。また、自分がやりたいと考えて、選択し、繰り返しそれについて思いをめぐらし、その活動を展開する中で、活動は深まり、達成感が得られる。子どもたちが全身で関わる中で、その活動が自分のものだと思えてくる。

〔自然学校例〕

- ・一人寝テントで一夜を過ごすなど自己を見つめるプログラム
- ・登山、川遊び、森林探検などから自分が挑戦したい活動を行う選択プログラム

〈社会に目を向け、多くの人々と関われるようにする〉

この期の子どもたちは、社会的な広がりが増し、世の中の人々の生活などの様子が目に入ってくるようになる。また、自分の活動を社会の人々の活動と重ね合わせ、つながりを感じることができるようになる。このため、社会に目を向け、多くの人々と関われるようにし、例えば、体験活動と教科や総合的な学習の時間との関連を図り、社会には様々な仕事や活動を真剣に追求している人たちがいることを理解させることで、自分たちの体験活動に本気で関われるようになる。

〔自然学校例〕

- ・漁港探索やイカの一夜干しづくりなどを通して、海で働く人々の暮らしを知る活動
- ・畜産農家で牛のブラッシング等を行い、地場産業や農業について理解を深める活動

〈体験活動を振り返り、意味を考えることを大切にする〉

体験活動を整理し、振り返って、その意味を把握することが可能になる時期である。体験は一度きりであるが、繰り返し時間をかけて、体験の全体を振り返り、意味を考えることを通して、体験活動の価値はより高いものになっていく。そのためには、体験活動のその折々の様子を資料として保持するなどして、振り返りを可能にする手立てを工夫することが大切である。また、体験活動の意味を把握するために、自分なりに整理し、感じたことを文章にさせて、意味を考えたり、友達と共有することも重要である。

〔自然学校例〕

- ・その日の活動をグループで振り返り、発表を通して気付きを促し、個人で振り返る活動
- ・グループでランプシェイドやたき火を囲んだカウンセルファイヤーなどの活動

体験活動の教育的効果

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| ◇現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上 | ◇問題発見や問題解決能力の育成 |
| ◇思考や理解の基盤づくり | ◇教科等の「知」の総合化と実践化 |
| ◇自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得 | ◇社会性や共に生きる力の育成 |
| ◇豊かな人間性や価値観の形成 | ◇基礎的な体力や心身の健康の保持増進 |

(参考文献) 体験活動事例集～体験のススメ～(文部科学省)

方策 6：家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

現状と課題

県立南但馬自然学校が行った「保護者が自然学校前後の児童の態度変容をどのようにみているか」の調査の結果、ほとんどの項目で事前よりも事後の方が高い数値を示し、保護者が自然学校の効果を実感している状況が明らかになっている。特に、事前から事後にかけて児童の変容が大きいと感じた項目は次のとおりである

- ① 自然と人間の生活には深いかわりがある
- ② 食べてもよい木の実や草を知っている
- ③ 朝、人に起されなくても自分で起きることができる
- ④ 脱いだ服や持ち物はきちんと整理ができる
- ⑤ みんなの意見をまとめることが得意である
- ⑥ 自然の中に行くと新しい発見がある
- ⑦ 工作をしている途中で、失敗した部分があっても自分で工夫して作品を完成させることができる
- ⑧ 自然の中は気持ちがいい
- ⑨ 歩いている途中で疲れていても、文句を言わずに歩き通すことができる
- ⑩ 誰とでも気軽に話をするすることができる

※実施 22 校から 220 の家庭を無作為抽出、開始直前に事前調査、終了後に事後調査を実施（回答 197 人）

①②⑥⑧から児童は、豊かな自然とふれあう中で、自然に対して興味関心を抱くとともに、豊かな感性や知的好奇心を育てている様子が見えてくる。また、③④から児童が親元を離れた生活の中で自立心を育むなど、自然学校の教育的効果が明らかになっている。

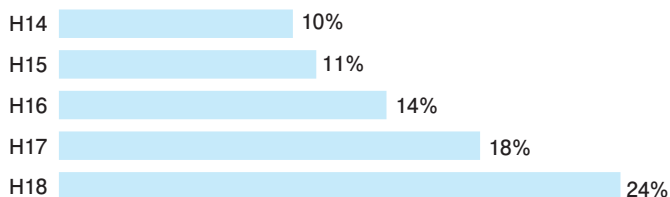
さらに、同時に行った保護者の自然学校に対する意識調査では、98%の保護者が「自然学校を体験させてよかった」と回答し、その理由は、「ふだん体験できないことができた」「楽しい体験だった」「自主性や協調性が養えた」などが高く、93%の保護者が再度自然学校のような体験をさせたいと感じている。

こうしたことから自然学校の教育的効果を一層高めるためには、保護者との連携が不可欠であり、保護者の自然学校への理解を図ることは勿論、一人一人が大切にされ、自他の良さや努力が認められる学級づくり等、自然学校を核に広い観点からの連携が期待される。

一方、近年、自然学校では、地域のボランティアを導入した取組が進められている。実施場所のボランティアの協力を得て、海岸の清掃奉仕活動を行うなどの取組であり、県教育委員会の調査からもこれらの取組が増加傾向にあることがうかがえる。これらの取組は、本県が全国に先駆けて実施している中学校の地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」へとつながっていくものである。

今後、充実した指導体制を図る観点から地域住民等学校支援ボランティアの参画を得た自然学校を推進することが期待される。

■地域ボランティア等との協力の推進



（自然学校実施状況調査：兵庫県教育委員会）



評価検証委員会の提言内容

「家庭と連携し、家庭の教育力を高める工夫」

- ・自然学校のねらい等についての理解を得ることや保護者の不安感を払拭する説明会等を工夫するとともに、個々の子どもの状況を十分に把握するための保護者とのコミュニケーションを十分に図ることが大切である。
- ・実施後に、自立心の向上や協調性の深まりなど、自然学校の成果について保護者と共通理解を図るとともに、例えば、具体的なエピソード等をもとに基本的な生活習慣や規範意識の不十分な状況を保護者に伝え、家庭との連携により改善を図るなど、自然学校を契機に子どもの社会的な自立等に向けた家庭の教育力を高めることも大切である。

「ボランティアの参画を得た取組」

- ・ボランティアの導入にあたっては、炭焼き体験など、地域の特性や本物に触れさせるため、地域の専門家としての導入や、活動支援など指導体制の充実からの導入など、導入目的及び教師の役割を明確に実施することが大切である。

「教育委員会や関係機関と十分な連携を図る取組」

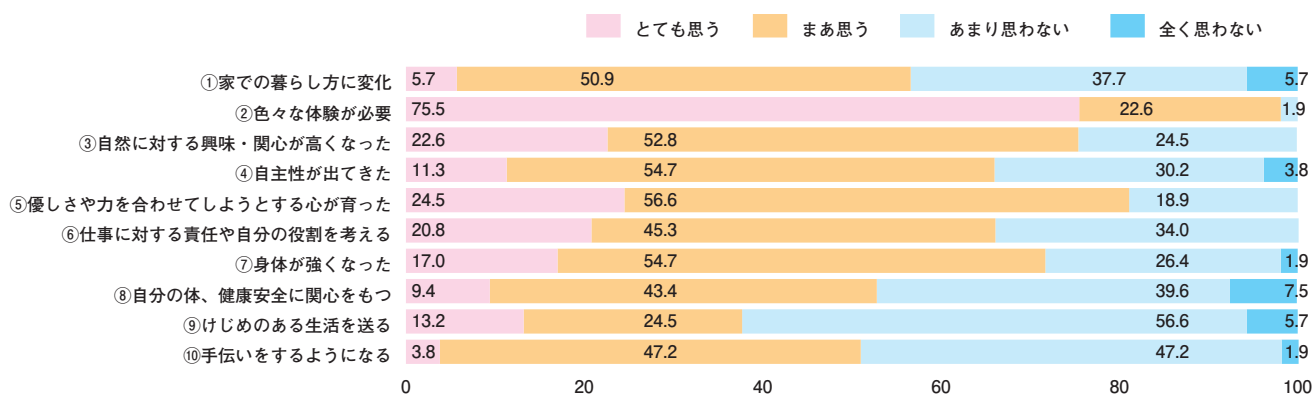
- ・体験活動の充実や健康・安全面の確保、また、特別な支援を要する児童の生き生きとした活動を支援する観点から教育委員会の指導・支援や医療機関など関係機関との連携を図る取組が大切である。

冊子「自然学校の思い出」の作成

自然学校修了後に作成したまとめの冊子を家庭に配付し、自然学校での成果等を保護者に伝え、自然学校の教育効果が一層確かなものとなるよう連携を深めた。

- (内容例)
- 自然学校実施期間中に実施した「振り返りカード」の「今日を振り返っての一言」や「心に残った今日の活動」の集計結果やその結果に対する子どもの感想。
 - 自然学校修了後に児童を対象に実施した「強く心を動かされた活動」「達成感や充実感を感じた活動」等のアンケート結果のまとめ。
 - 自然学校修了後に保護者を対象に実施した「自然学校後の子どもたちの様子」についてのアンケート結果と保護者の感想。

自然学校後の保護者アンケート



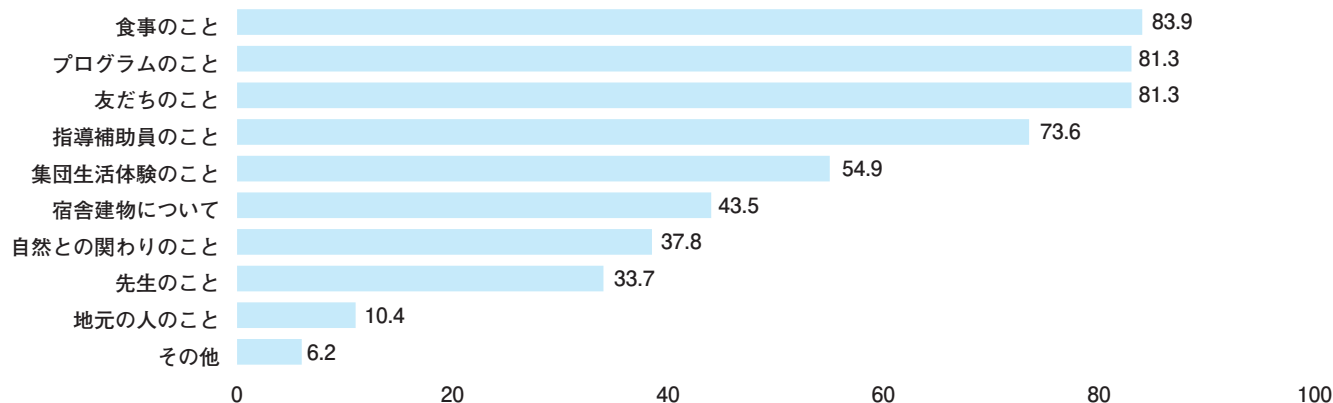
(保護者の感想例)

- 項目①について・・・自然学校修了後、わがままを言って困らせることが少なくなったように思いますし、自分に自信が持てるようになったかな?とも思います。末っ子ですのでどうしても甘やかしていましたが、私も子離れしないと思います。
- 項目④について・・・自然学校から帰ってきてからの第一声が「もう一週間泊まりたかった」でした。よほど楽しかったのだと思う反面、親としてはちょっと寂しかったです。一週間見ないと大きくなったなと感じ、少しずつですが、家でも自分なりの役割を考えて行動できるようになってきていると思います。
- 項目⑤について・・・みんなで協力したり、助け合ってやり遂げた喜びや成就感を味わうことができたようで、自然学校から帰ってきて、ふっと「これからは何でもすぐにあきらめんと頑張ってやったら乗り越えられるような気がする」と言った言葉を聞いて、とても充実した自然学校になったと感じました。

保護者アンケートをもとにした連携

児童が自然学校から帰って保護者と交わした内容を調査し、児童が自然学校で強く関心を抱いた内容や自然学校を通じた子どもの変容などについて保護者と話し合うことで、自然学校を契機に保護者との連携を一層深める取組も考えられる。

帰宅後の会話の内容



自然学校推進事業のあゆみ

年度	自然学校の推進内容	参 考	
S62 年度	●「こころ豊かな人づくり懇話会」設置 ●「こころ豊かな人づくり全県フォーラム」開催	・国の補助事業 自然教室(3泊4日)	
S63 年度	●自然学校の実施 小学校:113校 ・フォーラムの提言を受け、5泊6日の自然学校を実施		
H 元年度	●自然学校指導補助員・救急員等を確保する取組を開始		
H3 年度	●公立全小学校を対象に実施(～以降全校実施)		
H6 年度	●県立南但馬自然学校開校 ・自然学校指導者講座、プログラム研究開発、機関誌発刊等 ・震災による中止 小学校 12校 (阪神・淡路大震災)		
H7 年度	●自然学校推進事業における阪神淡路大震災の被災児童に対する補助金交付		・中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(H8)
H8 年度	●子どもたちに生きる力を育む教育懇話会		
H9 年度	●心の教育緊急会議 ●自然学校推進事業検討委員会の設置 ●感動体験プログラム構想委員会 ●自然学校 10周年記念紙上フォーラムの開催 ●自然学校 10周年記念誌の発行		・地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」(中学校 2年生)の実施(H10) ・中教審答申「幼児期からの心の教育の在り方について」(H10)
H11 年度	●生きる力をはぐくむ体験活動—自然学校を核にした体験活動の取組—の発行		
H13 年度	●自然学校推進事業検討委員会の設置		・学校教育法・社会教育法の一部改正(H13)
H14 年度	●自然学校充実プランの策定		・完全学校週5日制の実施(H14) ・中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等」(H14)
H15 年度	●県立南但馬自然学校開校 10周年シンポジウム開催	・兵庫の教育改革プログラムの策定(H15)	
H19 年度	●自然学校評価検証委員会の設置	・教育基本法等の改正等(H18・19) ・環境体験事業(小学校3年生)の実施(H19)	

自然学校評価検証委員会委員

●学識経験者

委員長 宮川 八岐 日本体育大学教授
副委員長 山田 誠 兵庫野外教育研究会代表
中野 友博 びわこ成蹊スポーツ大学教授
佐藤友美子 次世代研究所
(サントリー株式会社) 部長
池田 啓子 兵庫教育文化研究所副所長

●学校関係者

宮地サチ子 神戸市立和田岬小学校校長
藤井 潤 小野市立市場小学校教諭
北里 浩士 赤穂市立坂越小学校教諭
株本 治夫 豊岡市立五荘小学校教諭

●行政関係者

森本 雅樹 県立南但馬自然学校校長
眞鍋 昭治 西宮市教育委員会教育長
圓尾 哲一 太子町教育委員会教育長
竹谷 茂輝 淡路教育事務所自然学校専門指導員

●保護者

谷野 洋子 阪神北地域教育推進会議推進委員

発 行 自然学校評価検証委員会
連絡先 兵庫県教育委員会事務局義務教育課
〒650-8567 神戸市中央区下山手通 5-10-1 TEL. 078-341-7711 (代表)